

九州の景観づくりの心得

風景立国九州 美しい九州づくりに向けて

～九州の景観づくりの心得とは～

「九州の景観づくりの心得」は、美しい九州づくり懇談会の提言の一部で、懇談会の議論の中で出たテクニカルな意見を取りまとめたもので、提言の方針を進めるための参考資料となります。

「九州の景観のづくりの心得」は、国、自治体、市民等の九州の景観づくりに携わる人が、常に心がけておくべき着眼点として整理しています。

「九州の景観づくりの心得」は、これらにとどまらず、各地域での優れた景観づくりの取り組みの中で、培われてきた着眼点を抽出し追加していくことで、継続的に充実されていくものと考えています。

----- 1
----- 3
----- 5
----- 7
----- 9
----- 11
----- 13
----- 15
----- 17



九州の風景は各地域の個性を写す鏡であることから、まずは「地域らしさにこだわる」ことから始まります。

地域らしさは、地域の風土を支える地域の文化や景観にひそんでいて必ずしも見えませんが、それが失われてしまうと生物の生態系が崩れてしまう大事な骨組みでもあります。

身近なところに宝物がたくさんあります。この地域らしさをこれから見つけるためには、現状の突出したところだけを見るのではなく、地域の素材や地域独自のデザイン、地域の風合いを見極める景観資源の発掘が基本となります。



ambleside

)

(

展開例：地域らしさの要(キーストーン)を発掘する。

- 地域らしさをとらえるには、地域の文化や景観で要(キーストーン)となる要素を発掘することが重要です。
- キーストーンとは、それが壊れたら、周辺の系も一緒に壊してしまう象徴的な用語です。有名な場所だけでなく、まだ知られていないところにも「キーストーン」はあります。
- 地域らしさをとらえるには、地域のバナキュラー(風土的)な空間をとらえる視点が必要です。
- 地域の「個性」が感じられることの1つは地域の素材を使っていることです。時間とともに風合いが出てくるように、時間を見越してデザインすることが重要です。

参考事例



2001

- 英国、ambleside のまちなみは、地域の石材を使っているため地域らしさを持つまちなみとなっている。



地域らしさは、常に新たな発見や発掘があり、更に人の手によって育てられてくるものとも考えられます。

そのため、地域らしさが下から積み上げられた結果としていろいろな多様性が生まれてきます。一生懸命地域らしさを磨いている地域は、いろいろな多様性が生まれてきます。

多様であれば良いという訳ではありません。安易に他のデザインソースを持ち込むと“混乱”になります。

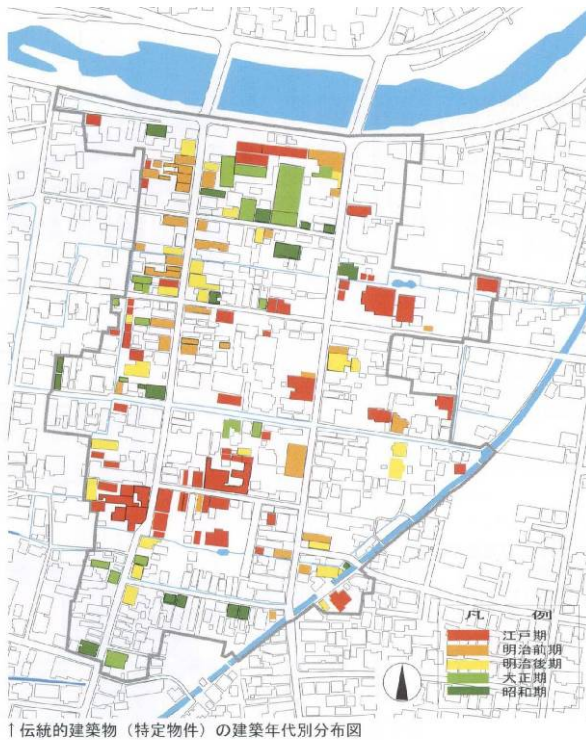


()

展開例：様々な地域らしさを磨き多様性が生まれる。

- 地域らしさと言っても、様々な地域らしさがあり、しかも地域らしさは身近なところにあります。
- 特に、歴史的な経緯をたどって発掘していくと、近代以降の歴史資源は発掘途上であり、一つ一つが新たな発見ともなります。
- 地域らしさを発掘し、磨き上げていくことは、長い時間がかかるものですが、この過程で様々な波及効果をもたらします。
- 磨かれた地域らしさは、まちづくりの中で展開することによって、市民の多様な活動の展開が期待されます。

参考事例



↑ 祇園祭



↑ 雑祭り時の御幸通り



↑ 観光馬車



↑ 雑祭り時の店舗



↑ 雑祭り時の店舗

()

- 日田市豆田地区では、江戸期から昭和初期にかけての建物が混在した建築年代、町屋型と屋敷型など建築類型が多仕様にあることが大きな特徴となっています。また、伝統的な「祇園祭」の復活や江戸時代のお雛様の一般公開などまちづくりの多様な活動が行われています。

多様性を生み出すためには、地域らしさの骨組みとなっている本物を見極めることが必要です。本物から学ぶことによって、質の高い景観が形成されます。

曖昧なデザインコードを用いて歴史的であれば何でも良いとすることでは、地域らしさが破壊されてしまいます。デザインコードも質の高いものを目指す場合はかえってじゃまになることもあります。

にせものに対しての本物を求め、人の声でなく、土地がどう望んでいるのかという土地の声を聞き取ることから「本物を目指す」ことをはじめなければなりません。

展開例：地域の中にある本物（オーセンティシティ）見極める。

○安易な景観整備によって、かえって本来の歴史的風致が損なわれることもあります。

○例えば、石垣を残す場合も、そこで残されている石をそのまま使う場合と、取り替える場合とでは本物と偽物の大きな違いが出てきます。

○景観の価値づけについては、オーセンティシティ（本物性）が、非常に重要なキーワードになります。

○保存・継承・回復すべき対象の特性を把握する調査をしっかりと行い、対象の持つオーセンティシティ（本物性）にこだわる必要があります。

参考事例



修理方針決定までの流れ

修理前



履歴調査

痕跡調査
記録の確認
所有者等への聞き取り

修理方針



- 日田市豆田地区では、それまでの修理修景事業を見直し、伝統的建造物群保存対象調査を行いました。ここでは、都市史調査、建築史調査、景観調査、地域社会調査をまとめて、伝統的町並みの特性を把握しています。また、建物の修理に当っては履歴調査を行った上で修理方針を決定します。

()

看板や電柱、さらに放置自転車など、風景を阻害しているものが数多くあります。こういった風景を阻害しているものを、削除する、もしくは収納する空間を整備し、乱雑な風景を整理することが重要です。

地域らしさにこだわり、広域から捉え、読み取った「その場所らしい美しさ」を、維持し、修復することが重要です。

こうした保全すべきものが既に失われていれば、再生を考えます。再生すべき「美しいもの」がない場合は、創出することになります。

創出にあたっては、奇抜なものではなく、長い年月にわたり、多くの人が理解でき、愛着を持てる「美しさ」であることを忘れてはなりません。

()

展開例：失われた機能を再評価する。

○伝統的な土木技術の合理性を再評価することで、その場にふさわしく、場になじんだ施設にすることができる。

○例えば、剛で対抗するのではなく、柔で力をいなす河川の伝統的工法の利用。

○保存・継承・回復すべき対象の特性を把握する調査をしっかりと行い、対象の持つオーセンティシティ(本物性)にこだわる必要があります。

参考事例

大正期の石井樋



石井樋略図「疎導要書」



復元された石井樋



●洪水を防ぎ、佐賀城下に水を引いていた、石井樋は、日本最古の取水施設であるが、昭和 38 年の大洪水で壊れてしまいました。この石井樋を、現存する象の鼻や樋はそのままの形で利用しています。

整備にあたっては、遺構の発掘や、水理模型実験、地区の優れた伝統的な土木技術の資料収集など、さまざまな観点で、本物づくりを実践しています。

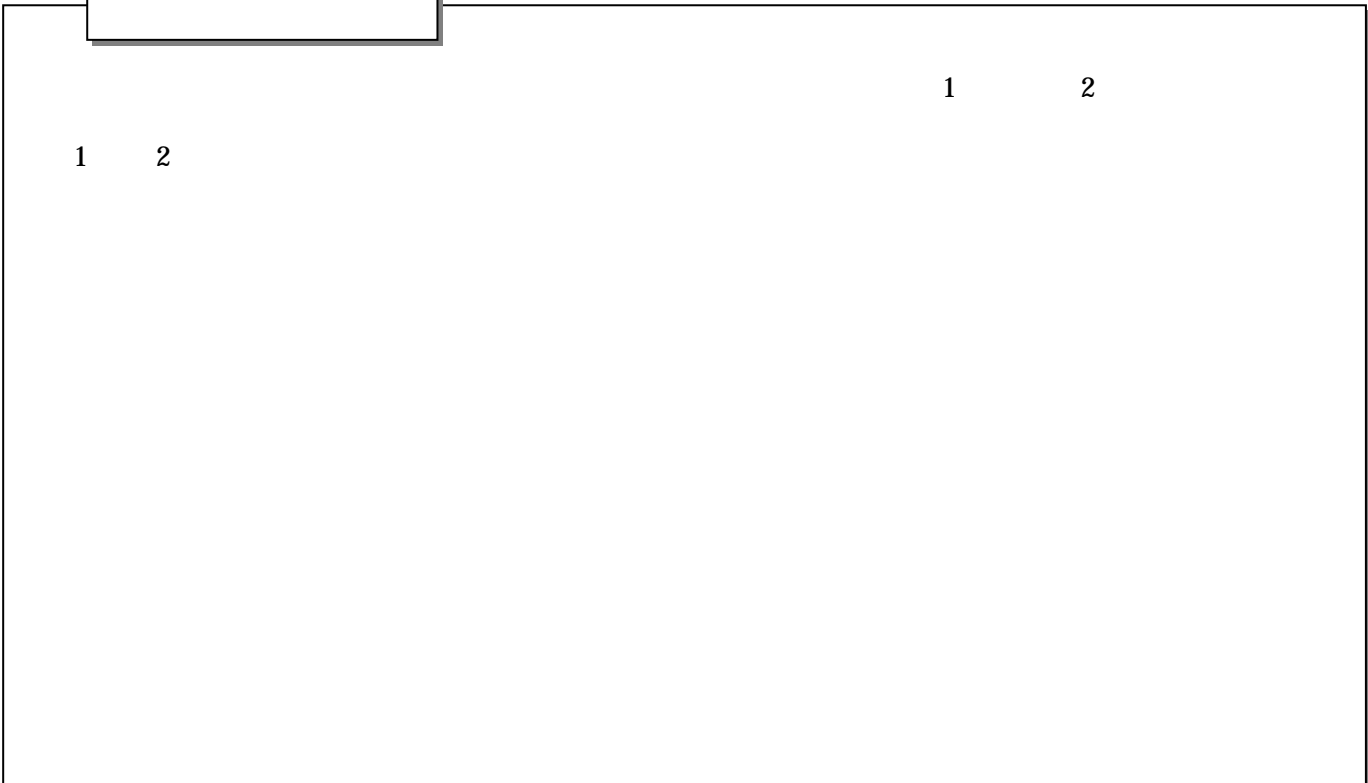
また、水門には鉄製ゲートを採用し、必要な部分には、近代土木技術との融和も図っています。



地域らしさにこだわり、多様性を生み出し、質の高いものを目指し続ける一方で、九州の景観を「広域からとらえる眼を持つ」ことも重要です。

例えば、河川流域でとらえると、上流・中流・下流に文化圏があり縦に結びついて海の文化に関係してきます。流域単位での非日常人口の蓄積状況とあわせて景観管理の必要性が見えてきます。また、行政区分を超えた景観管理のユニットのヒントも見出されます。

また、九州全体での緑に着目し、これまでのクリアランス型の開発に対し、九州の独特な樹木(緑)による修復改善型の景観づくりを進め、これを九州流としてアピールしていく必要があります。



展開例：流域の単位を活かして景観の特性をつかむ。

○景観のまとまりを認識する縦のつながりの単位として、流域を生かしていくことが有効です。

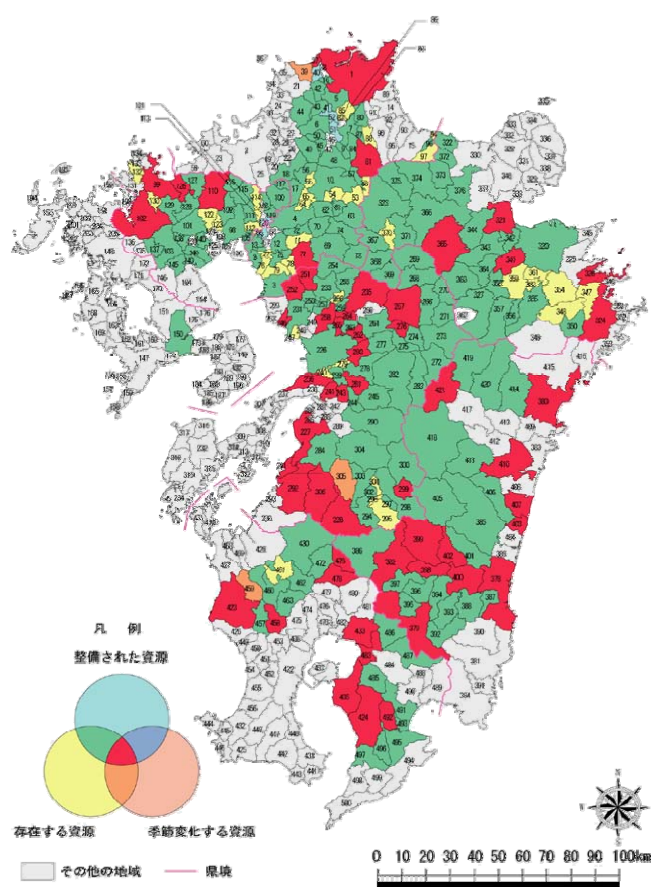
○景観管理のユニットとして流域に着目することで、景観の特性をつかむことができます。

○流域単位となるような環境資源が存在するかという特性と、大都市からの時間距離の特性を見て、九州のどのあたりに非日常人口が集まるかなどを検討することができます。

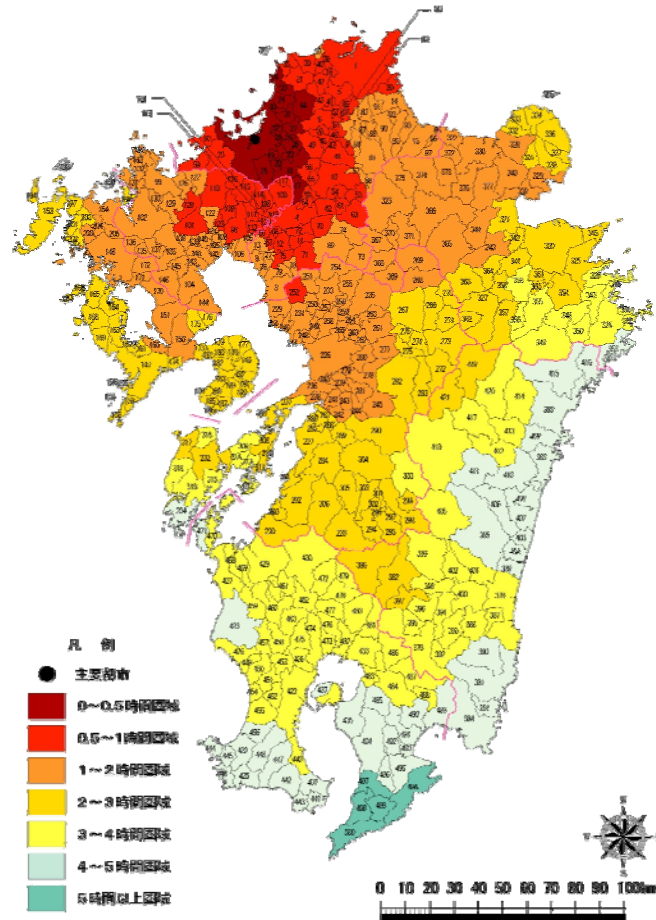
○九州を一括に扱う景観管理、特性に対応したユニットとしての管理やモデル地区づくりなどに活用できます。

参考事例

●流域ごとの環境資源の存在特性



●流域ごとの福岡市からの時間距離



●九州大学大学院包清教授により、流域単位の特性分析の研究が行われています。

これまでの景観検討は、整備に伴う周辺環境への影響緩和や対象物そのもののデザインとして取り上げられることがほとんどでした。言わば、どのように作るかの論理や手法として検討され、技術開発がされてきました。

しかしながら、景観法の施行を契機にして、これからの景観のとらえ方は、景観を地域の問題としてとらえることと変化しています。どのように作るかだけでなく、どのように暮らすのか、どのような地域にしていくのか、どのような社会にしていくのかという問いかけとしてとらえ直す必要があります。

そのためには、作る側からの景観の見方だけではなく、景観が社会や人にいかに影響をもたらすのか、社会や人の暮らしをどのように豊かにしていくのかという受け手の側に立った論理の再構築をしていく必要があります。

展開例：日常的な景観の問題に着目し、その背景を探る。

○景観の問題は、既にできているものをどう改善していくのかという日常的なところに問題が山積しています。

○景観とは単なる眺めではなく、経済や人の定住、環境、教育などの社会と深く関わっています。どのような社会にするのかが問われています。

○これからは、例えば道路を作る場合は、沿道の景観形成まで意識することが求められてきます。

○効率性だけでは、町は殺伐としたものになってしまいます。道路で言えば、現状の車社会と向き合い、答えを出す時期に来ています。

参考事例



●古くからの住宅が市街地の再開発ビルと隣り合わせになっています。



●郊外部ロードサイドの店舗や看板が景観を阻害しています。

地域での景観づくりの担い手として、まずは地域住民や役所の担当職員が重要な役割を持ちます。しかし、地域住民の意識も低く、担当職員の専門的技術も乏しいのが常であります。

景観の担い手を育てるためには、人材育成が非常に重要ですが、地域住民にまちづくりの意識を持ってもらうこと、職員の知識、技術を向上させることとともに、首長の理解を深めて意識を高めていくことも必要です。

更に、景観づくりの将来を担う子供のまちづくり教育を重視し、専門の学生(大学院生など)とのまち歩きなどを通して、自分の町に対する愛着を養っていくことをすすめていきます。

展開例：子供のときから町への愛着を育てる。

- 景観に対する感性は、子供のときの原風景によって育まれていくと思われます。子供は五感を通して町の雰囲気をつかんでいきます。
- 子供たちにとっての町歩きは、町の景観を肌で感じとり、町への愛着を持つ第一歩であると考えます。景観教育として最も重要な時期とも言えます。
- 子供たちはよく動きますが、子供たちを動かすためには先生が最初に教育を受けたいとうまくいきません。
- 川の分野は子供用の教材にはたくさん出ていますが、景観まちづくりの教材は意外とないかもしれません。このようなアプローチを行うことが大切です。

参考事例



福岡県美しいまちづくり 絵画展

自分の「まち」を絵に描こう

毎年、小学5・6年生が自分たちの「まち」を描いた絵画を募集して、表彰しています。

第9回絵画展、只今選考中！
応募件数は「919点」でした。
御応募ありがとうございました。

第8回絵画展 大賞作品「夏の秋月眼鏡橋」
窪山 裕美子 さん

15 (7)

- 福岡県では、子供たち向けの景観まちづくり教育に取り組んでおり、絵画展や、まちづくり教材を作っています。

地域住民の多数意見に基づいて景観形成をしても必ずしも良い景観ができるわけではありません。地域にとって、どれが本物であるか、どれが一番大事であるかを見極められる目を持った人材は限られています。そういう人の意見を尊重して聞くことがまず必要です。

また、景観づくりには専門家の力は欠かせません。専門家の投入は、基本方針の段階では遅すぎて、プランニングの段階で入ることが有効です。

一方、NPOとの連携や、市民ができるような運動に結び付けていくことが重要です。小学生から参加できる在来種での緑化の運動など、工夫していくことが必要です。

地域の本物を見極められる人、景観づくりの専門家と地元の市民の運動がセットであると良いものができていきます。



100

10

展開例: 専門家を入れて、関係する主体が連携する。

- 国、県、市町村が境界をこえて、常に連携していくしくみが求められています。
- 景観のプロや有識者が参加することで、地元の市町村と県、国が連携する体制が築かれていきます。
- 専門家が入ることによって、地元の住民の意識も変わり、景観づくりに参加することにもつながっていきます。
- 専門家が入ることによって、地元の住人の中にリーダーが育成される継続的な景観形成が期待されます。

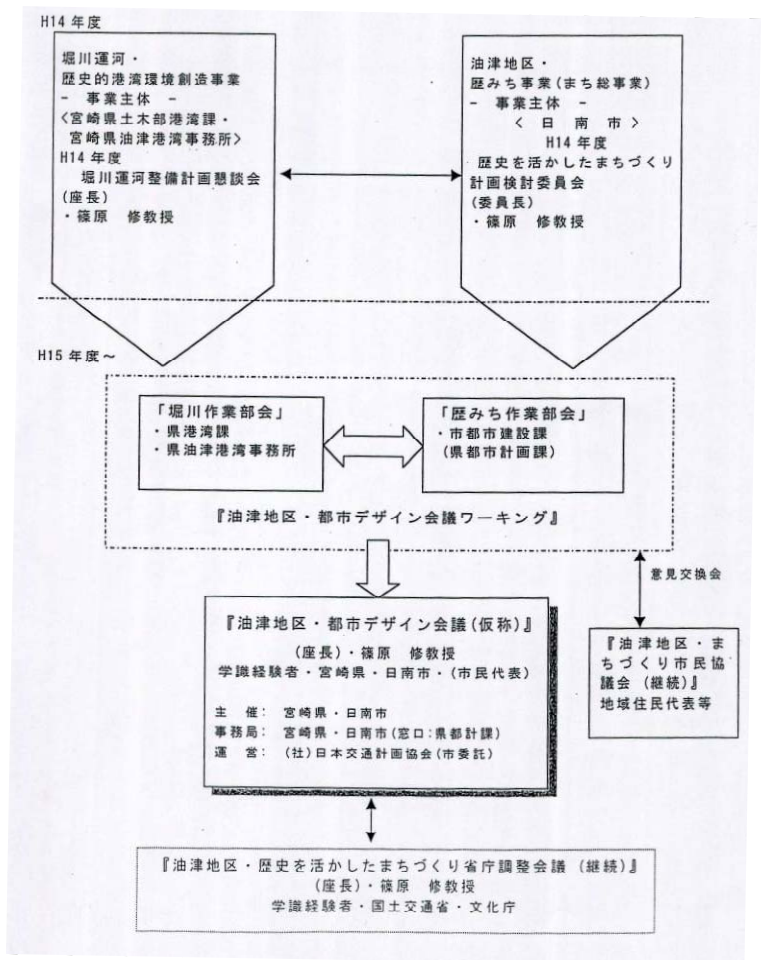
参考事例



●施工前



●施工後の遊歩道



●推進体制

. 36 2005. 1

()

- 宮崎県日南市油津地区の堀川運河整備と歴史を活かしたまちづくり事業は、専門家チームを中心に、県、市、国と地元市民グループが一体となった取り組みを進めています。

景観法ができ、景観づくりは地域でやっていかなければならない時代に入りました。どのようなしくみをつくり、進めていくのかということが求められています。

現状では、景観についてだれが意思決定をしていくのか、その意思決定の進め方やどういうことを考慮すべきかということがあいまいです。景観のとらえ方も、修景という後でお化粧するのとらえ方になっていたり、安く、早く、腐らないという論理で動きがちです。

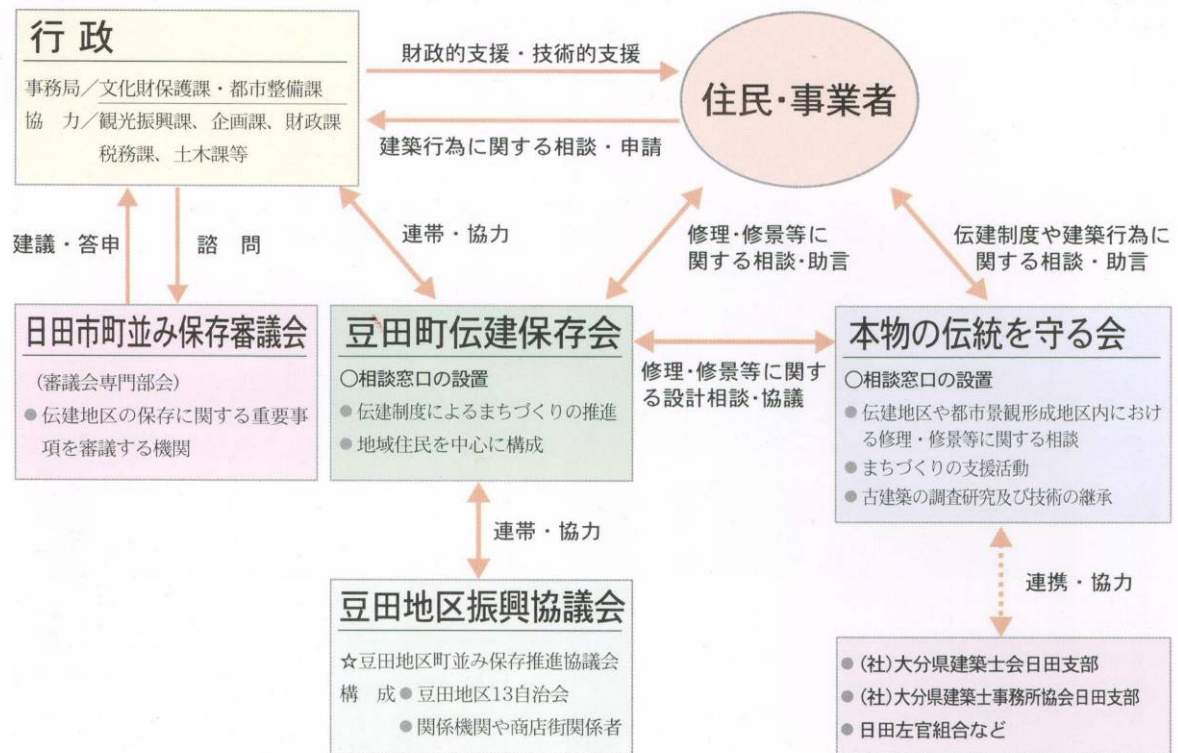
景観としての論理で、誰かが全部通してきっちり見ているようなしくみが計画から施工、維持管理までを通して必要です。仕様書のつくり方に景観の項目を組み入れたり、調査から計画設計の期間の改善など、景観づくりを進めるしくみを再構築する必要があります。

展開例：計画から施工まで一貫した景観のコントロールを行う。

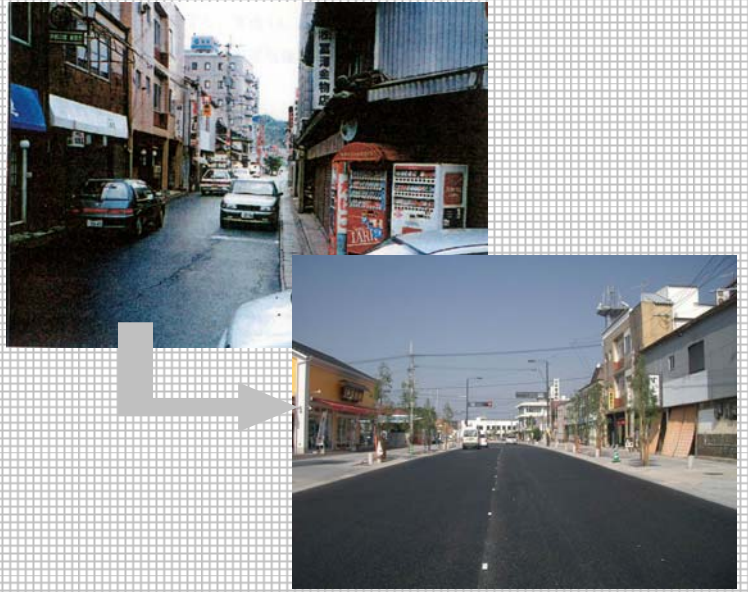
- 建築の世界では当たり前になっているマスターアーキテクト制は、土木や造園の世界ではほとんど限られています。
- 景観のコントロールは計画から施工まで一貫してかかわることで成果がでるものと思われます。
- 景観評価事業では、モデル的に一貫した景観コントロールの試みを行っています。
- 伝統的建造物群保存地区では、保存計画に基づき、建物の修理、修繕等に当っては、審議会が責任を持って審議に当たっています。

参考事例

まちづくりの推進体制・支援体制



- 豆田地区の保存システムでは、地域の住民をはじめとして、地元建築士等の技術者や行政関係者、専門家との協力関係や信頼によって永続的に制度が運用されていきます。



必ず設置するもの、したいもの necessary elements

- <機能的議論 function>
地上機室の数、バス停、信号の増設 → 官に任せず自分たちで交渉
- <機室の位置 location>
車乗入れ口、車止め、地上機室などの位置 → 住民の要望を聞きながら、官が整理し、住民の同意を得た

設置するかどうか住民が決めてよいもの elements that citizens can choose

- <照明 light>
歩行者用照明を設置するか
街路灯にするか → フォトライフを採用
- <線形防止柵 guard rail>
歩行が邪魔しないよう設置するか → 設置しない
- <緑について green>
街路樹を植えるかどうか
紙木はどうするか
樹種は？ → 歩行者にとって快適な道を目指す → 落葉樹を植え、住民が管理する仕組みを検討する



17m

14

15

2

12

()

No.



2002

[] / []

NTT

2005

(

